

Port to Port #5 ‘Roots and Rhythms’^{*} — 青森県八戸市でのアーティスト・イン・レジデンス プログラム実践報告 —

東方 悠平[†]

Port to Port #5 ‘Roots and Rhythms’ Practical Report on the Artist-in-Residence Program Conducted in Hachinohe City

Yuhei HIGASHIKATA

ABSTRACT

In 2024, the author invited an artist from the Indonesia, Sultan Putra, to Hachinohe City, Aomori Prefecture, under the AIR program Port to Port #5 ‘Roots and Rhythms’. This paper is a report on the activities of the program, which included two workshops, one exhibition, and one symposium. The author confirmed that the AIR system has various positive effects on the local community and the people involved.

Key Words: Artist in Residence, Art Project, Contemporary Art

キーワード: アーティスト・インレジデンス, アートプロジェクト, 現代美術

1. はじめに

本稿は、AIR-H/Artist in Residence Hachinohe によって実施された AIR プログラム、Port to Port #5 「Roots and Rhythms」の実施報告である。AIR-H とは、2017 年に筆者が立ち上げた、青森県八戸市でアーティスト・イン・レジデンス（以下 AIR）を軸に芸術文化活動を行う活動体であり、その活動の一つである Port to Port は、八戸港とフィリピンのマニラ港が姉妹港であることを手がかりにして始まった AIR プログラムである。本プロジェクトは、フィリピンから招へいしたアーティストが八戸市内に滞在し、漁業や水産加工業、観光、植生、地域の人たちの生活や風習など、さまざまな地域文化を調査・比較し、思考を深めながら作品制作などを行ってきたプロジェクトである。これまでに 4 名のアーティストを招へいした¹⁾。

5 回目となる Port to Port #5 では、これまでフィリピンのアーティストのみを招へいしていたが、今回はインドネシアのアーティストを招へいした。これは、新たな発見や展開を求めるとともに、これまでの活動を相対化する意図によるものである。

^{*} 令和 7 年 1 月 31 日 受付

[†] 八戸工業大学感性デザイン学部・准教授

2. 事業内容

2.1 プログラムについて

今回のプログラムには、「Roots and Rhythms」とタイトルを付けた。招へいアーティストのスルタン・プトラは、これまでにインドネシアはジャワ島で、自身の出身地の歴史や、イスラム教の伝来と広がりなどについてリサーチを行い、作品を制作してきた。そのスタイルから、八戸市での滞在制作で起こりうることを想像し、事前にタイトルを決定し、広報物を制作した。(図1)

- ・ Port to Port #5 Sultan Putra 「Roots and Rhythms」
- ・ 招へいアーティスト：Sultan Putra / スルタン・プトラ (通称ギラン)
- ・ 滞在期間：2024年9月22日-10月22日
- ・ 主な滞在场所：青森県八戸市

プログラム中には、2回のワークショップ、1回の展覧会、1回のトークイベントを行った。



図1 Port to Port #5のための広報物 表裏 (デザイン：芳賀永菜)

2.2 招へいアーティストについて

今回招へいしたアーティストのスルタン・プトラは、1998年生まれ、インドネシアのジャワ島東部にあるシドアルジョ出身で、スラバヤ市をベースに活動している。インドネシア国立スラバヤ大学でファインアートを学び、2023年に卒業した。絵画作品を中心に制作しながら、それらを用いてインスタレーション作品へと展開することが多い。

インドネシアでは、多くのアーティストがコレクティブとして活動している。インドネシアのアートシーンの変遷を民俗誌的に記述した廣田は、1997年～2005年にかけて、コレクティブの前身となるようなアーティスト集団がインドネシアで盛んに結成されたと述べる²⁾。2000年にジャカルタで結成されたコレクティブの *ruangrupa* は、その後、2022年にドイツのカッセルで開催された国際的な現代美術の展覧会であるドクメンタ 15で芸術監督を務めるなど、大きく注目された。スルタン・プトラも、2018年に大学の同級生らを中心にして *Kecoak Timur* という名前のコレクティブを結成した。名前には、東ジャワのゴキブリという意味があり、アート界をゴキブリのように逞しくサバイバルしていくというメンバーの意思が込められている。スラバヤに共同スタジオを持って

作品制作やイベントを行いながら活動している。

3. 活動内容

八戸市での AIR プログラムでは、アーティストが滞在して生活することを中心に、さまざまな活動を行った。一昨年度に実施した Port to Port #4 における実施報告書³⁾の構成に倣いながら、特に、①ワークショップ、②オープンスタジオや作品展示などの展覧会、③シンポジウム、トークイベントの3つを中心に活動報告を行う。

3.1 ワークショップ

本稿で紹介するワークショップは、スルタン・プトラにとっても初めて行ったスタイルのワークショップであった。アーティストは、日本での長期滞在にあたりインドネシアからコーヒー、煙草、インスタントラーメンや調味料といった生活用品を持ち込んだ。それらを通じて、インドネシアでの生活や文化について雑談をしているなかで、本ワークショップは構想された。

インドネシアでのコーヒー生産の歴史は古く、オランダ植民地時代に持ち込まれ、1830年代にはプランテーション栽培が始まった。特にジャワ島で生産されるコーヒーは、独特の風味で知られる。多くはロブスタ種で、フィルターなどを通さずに粉をそのままカップに入れてお湯を注ぎ、粉が下に沈殿してから上澄みを飲む。

上述したコーヒーのかすや沈殿物を意味するのが、ジャワ語でチェテ/Cetheと言われるものである。インドネシアでは、カフェでコーヒーを飲みながら煙草を吸い、会話をしみつつ、仲間や友人と長時間過ごす習慣がある。チェテとは、そういった際に飲み終わったコーヒーカップの底に残った粉を使い、棒や爪楊枝で煙草に絵や紋様を描いて装飾する行為でもある。

本ワークショップでは、まずアーティストから、自作やインドネシアでの生活の様子などについて紹介があった。その後参加者は、インドネシアのコーヒーを用いて制作活動を行った。煙草の代わりに画用紙を小さく切った紙片に穴を開けたものに、実際にコーヒーを淹れ、その残рикаすを使って爪楊枝で絵を描いた。(図2-9)

(1) ワークショップ①

- ・タイトル：Cethe/チェテ コーヒードロ잉ワークショップ
- ・日時：2024年9月25日(水) 13:00-16:00
- ・会場：八戸工業大学感性デザイン学部棟 9-301
- ・参加人数：27名



図2 生活の様子を紹介するアーティスト



図3 コーヒーの粉の匂いを嗅ぐ参加者



図4 参加者が作品を制作する様子



図5 参加者が作品を制作する様子

(2) ワークショップ②

- ・タイトル：Cethe/チェテ コーヒードローイングワークショップ
- ・日時：2024年10月11日(金) 13:00-16:00
- ・会場：八戸学院大学短期大学部幼児保育学科棟
- ・参加人数：12名



図6 煙草に描いた試作品



図7 描き方を説明するアーティスト



図8 コーヒーの味見をする参加者



図9 参加者の作品

参加者は、まずコーヒーの粉を画材として使用する行為に驚きや興味を示した。また、コーヒーという身近な食品を導入にして、異文化に対する興味や関心が開かれている様子が観察された⁴⁾。参加者は、コーヒーの味や香りを楽しみながら、リラックスした雰囲気の中でワークショップに取り組み、アーティストと交流していた。このことは、ワークショップの最初に紹介された、ノンクロン/Nongkrong⁵⁾という、ドクメンタ15でも注目されたインドネシアの文化を部分的に体感することにもつながった。また、ワークショップ後には参加者に対して感想等を聞き取るアンケート調査を行った。

3.2 トークイベント

(1)シンポジウム

- ・ AIR シンポジウム
- ・ 日時：2024 年 10 月 20 日(日) 11:00-13:00
- ・ 会場：ばんらぼ（八戸工業大学番町サテライトキャンパス）
- ・ スピーカー：スルタン・プトラ（招へいアーティスト）、羽鳥悠樹（美術史研究者）
- ・ 参加人数：44 名



図 10 羽鳥によるトークの様子



図 11 スルタン・プトラと羽鳥が話す様子

シンポジウムは、スピーカーとしてインドネシア近現代美術史の研究者である羽鳥悠樹をゲストに迎えて行われた。羽鳥は、2017 年から 2019 年にかけて約 2 年間インドネシアに滞在し、調査・研究を行い、近代のインドネシア美術から、進行形の現代美術の状況にまで関心を広げて研究実践を行っている。招へいアーティストのスルタン・プトラも、もともとは羽鳥がインドネシア滞在中に出会い、その活動を知ったアーティストである。

トークイベントの中では、羽鳥によってインドネシアという国の地理や歴史についての概略から、S.スジョヨノ (Sindoedarsono Soedjojono, 1913-1986) によるインドネシアの近代美術運動、現代のコレクティブ活動やドクメンタ 15 のことまで、インドネシアの多岐にわたる状況が紹介された。また、スルタン・プトラの作品や活動についても、本人による説明のほかに羽鳥からの解説が加えられた。

3.3 展覧会

(1)展覧会

- ・ タイトル：「Roots and Rhythms」
- ・ 日時：2024 年 10 月 16 日-20 日 11:00-18:00
- ・ 会場：ばんらぼ（八戸工業大学番町サテライトキャンパス）
- ・ 来場者：約 120 名

成果発表の展覧会は、八戸工業大学のサテライトキャンパスとして使用されているビルの一階オープンスペースの手前部分を利用して開催した。会場の入り口には、インドネシアの伝統的な影絵芝居ワヤン・クリのキャラクターであり、ヒンドゥー教の神としても知られるクリシュナの線画が描かれた大きなロール紙が吊り下げられた。観客は、この紙に一円玉や五円玉などの硬貨をこすりつけてフロッタージュを行い、線画の内側を埋めていく仕掛けになっている。入り口付近にはドロ

ーイングブックが置かれており、観客は自由にページをめくって鑑賞できる。それぞれのページには、アーティストによって青一色で描かれたドローイングが日記のように描かれている他、乾燥した植物や鳥の羽、五円玉など日常の中で収集されたオブジェクトが縫い付けられている。壁面には、八戸市内の神社や公園で見つけられた、祀りや記録のためのモニュメントを描いた作品が並ぶ。それぞれの作品には、発見された場所や来歴が日本語で説明されているキャプションが添えられており、観覧者に「何か知っていることがあれば教えてほしい」と呼びかけている。さらに進むと、上面に大きな手のひらが描かれた木製の台座があり、その上には一円玉をはじめとする日本のお金が積み上げられ、ペットボトルに入った水や瓢箪などが並べられている。その右には、上面に穴の開いた箱が高さのある木製の台の上に設置されており、観客はその穴に手を入れて、おみくじのようなものを1枚引くことができる。9種類あり、それぞれにワヤン・クリのキャラクターの1体が描かれている。壁面には、人の手を描いたドローイングが複数貼られており、合掌しているようにも見える。また、会場内には録音された本物のカラスの鳴き声が流れている。鑑賞者は、単に作品を眺めるだけでなく、さまざまな形で作品やアーティストと関わる展覧会になっていた。



図 12 コインをこする参加者



図 13 壁に並ぶドローイング作品

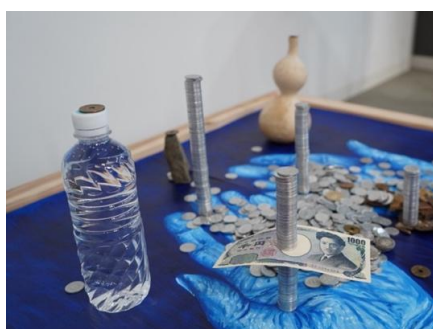


図 14 積み上げられた硬貨など



図 15 おみくじを模したものを引く参加者

本展の特筆すべき点は、現代の日本、特に八戸における「祈り」の形に焦点を当て、それらを抽出し表現している点である。アーティストは、八戸市内の神社や仏閣を何度も訪れ、建物や周囲の環境だけでなく、像や石碑、鳥居、水場、賽銭箱、おみくじといった要素にも関心を寄せた。また、訪れる人々の行動や習慣、文化にも注目し、写真や映像で記録することや、ドローイングを描くことなどでリサーチを深めていった。例えば、八戸市是川に残る縄文文化は、近代的な宗教が確立する以前の、自然や生命に対する原初的な「祈り」の形として捉えられた。これらの要素は、アーティストの故郷であるインドネシアにおける、イスラム教成立以前の原始宗教と部分的に重なるものであったとも考えられる。



図 16 石碑をリサーチする様子



図 17 由来を調べる様子

4. 考察、まとめ

青森県八戸市で 2024 年に実施した AIR プログラム、Port to Port #5 「Roots and Rhythms」について、インドネシアから招へいたアーティストのスルタン・プトラによるワークショップや展覧会、シンポジウムを中心に活動報告を行った。アーティストが滞在制作することで、文化的活動が発生し、さまざまな形で広がりを見せた。イベントの参加者や鑑賞者にとどまらず、一般の市民の中にも、アーティストと交流し、活動を手伝う人が現れた。今後も、これらの影響や効果を測定し、これまでの取り組みと比較しながら研究を続けていきたい。

謝辞

Port to Port #5 「Roots and Rhythms」招へいアーティストのスルタン・プトラ氏、アーティストを推薦した研究者の羽鳥悠樹氏、アーティストの今井さつき氏に深謝する。また、今回の展覧会、ワークショップ、シンポジウムなどに関わった協力者、参加者、鑑賞者に謝意を表す。さらに、ワークショップ実施に際しては、八戸学院短期大学の教員でありアーティストの池田拓馬氏、船山哲郎氏にサポートを受けた。加えて、本プログラムは令和 6 年度青森学術文化振興財団の助成を受けて実施された。また、2024 年 10 月 16 日-20 日のプログラムについては、デーリー東北新聞社の後援を受けた。

注

- 1) 東方悠平「Port to Port #4 'CITE' ―青森県八戸市でのアーティスト・イン・レジデンスプログラム実践報告―」『八戸工業大学紀要』第 43 巻、2024、pp. 92-101
- 2) 廣田緑『協働と共生のネットワーク インドネシア現代美術の民俗誌』grambooks、2022、p.352
- 3) 東方悠平、同上、本研究では、アーティストが地域で生活する中で生じる多くの目に見えない事象も AIR プログラムにおける成果の一部であると捉える。しかし、これらの効果を測定するには長期的な研究や観察が必要であるため、本稿では、展覧会やワークショップといった具体的で明確な活動に焦点を当てて実施報告を行う。
- 4) 東方悠平 口頭発表「日常食品を用いたワークショップから広がる異文化理解の可能性 コーヒードローイングワークショップ 'Chthe' 実践報告」環境芸術学会 第 25 会大会、2024 にて発表。
- 5) ノンクロン/Nongkrong、人がカフェなどエー所集まって、長い時間コーヒーを飲んだり煙草を吸ったり、話をしたりして時間を共有するインドネシアのコミュニケーション文化。

図の出典 本文中の図 1-17 は全て筆者による。

要旨

2024 年に AIR プログラム Port to Port #5 「Roots and Rhythms」を実施し、インドネシアのアーティスト、スルタン・プトラを青森県八戸市に招へいした。本稿は、その活動の一環として実施した 2 回のワークショップ、1 回の展覧会、1 回のシンポジウムに関する報告である。インドネシアの食文化に触れること、日本との宗教観の相違について考察することなどが起こった。AIR という仕組みが、地域や広義の関係者に対して多様な可能性を開くものであることを確認した。

キーワード :アーティスト・インレジデンス, アートプロジェクト, 現代美術